

## 春岡村の伝説

### ●有無と膳棚(寅子伝説)・続

絶世の美女、虎子は多くの若人に言い寄られ、思い悩んだ末自害してしまった。養父はそのことは口外せず、昔亡くなった娘の周忌と偽って村の若人を集めた：

若人達は喜び勇んで虎子のもてなしを受けようと、集まった若人は三十余名。やがて老父は一同に向かって「よくお出で下さった。何はなくとも虎子の手料理、どうか召し上がっていただきたい。虎子もやがてこの場に見えるでしょう。」出された料理は酸い味のする肉片(膾：なます)だった。若人達は不思議に思いつつみんな食べてしまった。すると老父が一同に向かつて「私共はずでに一人の実子を亡くしてここに三十余年、虎子を養女として育ててきました。虎子は元藤原の出と聞いております。鎌倉からのおたずねもの、虎子のために村は平和もなく、いずれ禍を招くであります。昨夜因果をふくめましたところ、自害して相果てました。わが子の周忌と偽ってもてなした料理こそ、虎子の肉体でございませ。かくなる上は、各自が虎子を授かったと思召して、虎子のことは打ち忘れ、どうか家業に精を出してください。」と泣き崩れた。一同は翌日相寄り合つて相談し、虎子の遺骸を篤く葬り、ねんごろに供養した。

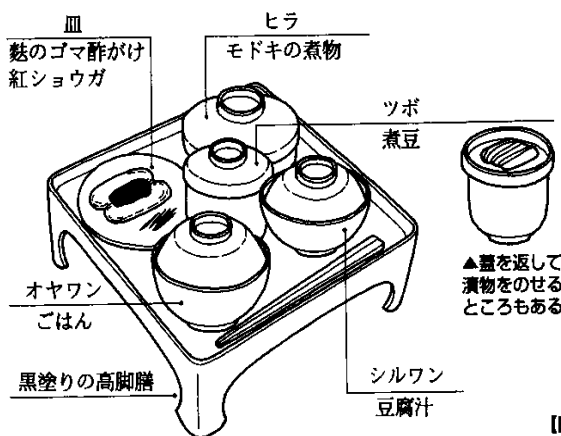
応長元年(延慶四年)(一三一―)村人は秩父の山奥からまれに見る大きな青石を見つけこれを運び、石碑として僧を招いて碑面に「南無阿弥陀仏」の六文字と虎子の自害の日である延慶四年三月八日を書き添え、鎌倉扇ヶ谷から名工を招いてこれを刻み、正和二年(一三一三)三月八日建碑式を行なった。

この供養にあたり、使用する膳棚を深作村の中央、見沼代用水の傍らの指物師に依頼した。こうしたことから膳棚の名が出来たが、膳棚は膳店(ぜんだな)の転じたものである。

虎子の家では彼女の調度品や供養に使用したものをそのまま家に残しておくにしのびなかったとみえて、その後見沼代用水に流したので、人々はその畔に来ては、その遺物を探し求めた。ある人は下瓦葺から丸ヶ崎へ入るあたりで漂っているのを見たとか、またある人はどこへ行つたか全然見つかからないなどと言って、とうとうその辺一帯を「あるなし」「有無(あんなし)」というようになつた。

この「有無」については、虎子の骨がここに埋めてあるとか、いやないとかいうところからこの名がついたともいわれている。

出典『思い出の春岡』銭場佐一郎著



(参考・小川町の農家の葬式の本膳)

「有無」の字名は16号線のジエームスの裏の「有無公園」にその名が残っています。

(平山由喜)